

へまいが、幸に之を知るに一層優れた出版物がある。

それは逸見梅榮君が、佛陀伽耶の古い玉垣の美事な寫眞を印度から招來し、之に説明的標題を附し、高楠、小野兩教授の序文を添へて出版されたものである。恰もこの圖版は、バルハットの圓形彫刻を之に加へ、サーンチーの第二塔の玉垣と、その第一塔の門との間の過渡を示すものである。即ち、一方で、多くの柱では、簡単な題材が尙ほ蓮花の中に半ば取籠められてゐる、従つて最も古代的な様相を示してゐるが、他方で、已に傳說的場面をも試みて居り、其結果覗ひ所も手法も遙かに進歩を見せてゐる。而して、全體として、其の題材は、已に殆んど全く、特に佛教的になつて了つてゐるのである。

之等の古い玉垣を一括して考へ、其の各部分は、假令皆同一人の手に成つたとしないまでも、同一工作場で出來たとするのは、極めて有勝ちな試みではあるが、最初にその不可なる事を注意しておかねばならぬ。柱の中で、特に入口の隅になつてゐるものは、遙かに鍛へられた型に依つて、後代に手を入れたものであり、又全然取替へたものすら存する。佛陀伽耶に於ける塔の普